

# 源氏物語の白氏文集受容

— 諷諭詩の場合 —

目加田 さくを

白氏文集は、前後続あわせて七十五巻の大詩集であるが、大なる所以は、単に収められた詩篇の多数のみによるものではない。元槲が序でいうように

比上書言得失 因為賀雨秦中吟等数十章 指言天下之事 時人比之風騷焉

彼は頻りに上書して行政の得失を論じ、秦中吟等を制作して天下の事を指し言う、天下万民の困窮の實態をまさしくと詠出して、天子・為政者の反省を求める諷諭詩に精髓をこめた。この諷諭詩を重しとする、即ち、花鳥風詠にとどまらず、汎く天下庶民の暮しに、ひたと心をよせ、その痛苦悲惨を取り除こうと渾身の魂をそそぐ彼の詩心の宏大無辺・豊饒・繊細・技巧の精緻にある。文集冒頭巻一より巻四に及ぶ諷諭詩の存在におもいをいたさねばならぬ。彼の詩業には、天下にあふれる文字なき民の呻きを、声に、詩にうたいあげる、行役に駆り出される壮丁とその留守を守る老翁嫗・妻子の暗い絶望の日日、これを何とかなしければと、民政に眞向から立ち向う士君子の精神が、背骨として太々と一本通っているのを刮目してよみとらなければならぬ。

源氏物語の白氏文集受容 — 諷諭詩の場合 —

東洋において、詩は君子、知識階層男子學生の大事業であった。行役・苛斂誅求に喘ぐ民庶の貧窮を、熱涙をもって詠出する杜甫の詩業が何よりも如実にものがたる。杜甫の、たとえば、「石壕吏」「新婚別」「無家別」「兵車行」「前出塞」等々に接しては、何人も深い感動が身内に湧きおこるのを覚えるであろう。杜甫は全精神を詩作にこめて、為政者の心を動かし、良き政治をとり行わせようと切望した。白樂天も亦、それを承継した詩人であった。たとえば、後世、万曆丙午孟秋、重刻白氏長慶集に序した呉郡の婁堅子柔が次のように述べる。

「其於作者之指無所不窺 而尤以杜子美為宗師 雖渾涵雄偉未足庶幾 要為能言其所欲言矣 觀白公之所以自見其意者 尤在諷諭樂府諸篇……………」

中国における偉大な詩業の間に——詩経、楚辭、杜甫、白樂天と承継された諷諭、諷諫の詩精神は、そのまゝ我が山上憶良にうけつがれ、貧窮問答歌・熊凝歌（恐らくは志賀白水郎歌も）等の詠歌が制作される。十世紀には善居逸の意見封事十二ヶ條、藤保則伝にその精神は脈々と流れ、その後は、篋底に秘められた日記の形で、宇多

宸記・小右記・春記等に、歴史物語の姿をとっては大鏡へと流れていくのであるが、それは既に拙著「大鏡論」漢文芸作家圏における政治批判の系譜」に詳述したところ。再び諷諭詩にもどって考えてみよう。白氏文集は次の目次で編纂されている。

卷一〜卷四 諷諭 卷一 1 卷二 2 卷三 3 卷四 3 計 9 回 9/4

卷五〜卷八 間適 卷五 0 卷六 0 卷七 0 卷八 0

卷九〜卷三 感傷 卷九 0 卷十 1 卷十一 0 卷十二 6 計 7 回 7/4

卷三〜卷七 律詩 卷三 1 卷四 3 卷五 0 卷六 2 卷七 1 卷八 0 卷九 2

卷十 0 卷十一 1 …… 卷十九 1 卷二十 1 ……

巻共 7 巻 詩賦 0 計 14 回 14/25

源氏物語の白詩引用を表示すれば、右のように、24首が三十回に及んで、諷諭・感傷・律詩から引用されている。実は、源氏引用詩人歌人中、白楽天が最高である。注目すべきは次の諸点であろう。

A 先ず、諷諭の詩は、諷諭四巻の各巻にわたって引用されていること。しかも9回という高い頻度であること。

B 次に、感傷詩四巻の7回引用である。長恨歌が源氏物語中、桐壺<sup>2</sup>回、夕顔<sup>1</sup>回、葵<sup>1</sup>回、幻<sup>1</sup>回と計5回繰り返しかえし引用されていること。

桐壺巻更衣死後の條は、長恨歌の世界を裏打ちしたところの、表裏の二重構造で桐壺帝・桐壺更衣死別の感傷場面が造形されていること。

C 律詩は二十五回巻中 14 回  
D 間適詩は四巻ともに引用なし。 E 詩賦三十三巻引用なし。

#### A 諷諭詩の引用の問題

白氏文集において、諷諭が開巻劈頭四巻を占めるといふ事実の意義について、

作家の側からいえば、白楽天が諷諭詩をいかに重視していたか、それを如実にものがたるものである。

受容者、即ち読者、ここでは日本の平安朝も十世紀末、紫式部という一読者の側からみよう。それ迄、白詩の著名な詩句は父の口から、しばしば耳にしていたであろうが、はじめ、文章生出身漢詩人為時秘蔵の白氏文集の披見を許された式部は、胸の高鳴りをおししづめ、並々ならぬ期待と緊張をもってひもといたであろう。開巻。まづ目につく「諷諭」の巻名。しかも四巻つづく。その詩百六十四篇は、何れもすつしりと重く厳しい人生の詩である。今迄式部が馴染んできた和歌のそれとは全く異質の世界が展られたのである。古今集二十巻（春上下・夏・秋上下・冬・賀・離別・羈旅・物名・恋一〜五・哀傷・雑上下・雑体・大歌所歌）と、同じ詩歌でありながら、何と違った世界、苦しく、生々しい息吹のきこえる詩であろうか。有為の才をもつと自負しながら、壮年にして「洛中泰適翁」と自認せざるをえなかった父為時の、貧しく鬱屈した日々が、そこにはそのまま詠出されているではないか。「悲哉行」「羸駿」に接した時、式部の心は一瞬、奮いたったであろう。諷諭四巻が式部に与えた感動と共感の深さをおもわざるをえない。

○式部の披見の通りあとづけてみよう。

巻一 諷諭——「賀雨」よりはじまる。式部は先ずこのユニークな詩題に一驚したのであろう。古今集は立春からである。

① 賀雨 (元和三年冬より春末まで早。「罪己詔」を下した。七日にして晝夜三日の降雨。王者心憂樂與衆同……)

2 説張籍古樂府 (張君の詩は「放逸君」を諷すべく「貪暴臣」を諷へく……)

3 哭孔叢 (孔叢の死、憲府、諫司につかせ邪を弾ぜしむべかりしあたら人材を。)

4 凶宅 源氏物語夕顔巻引用 5 夢仙

6 覬刈麥 (田家の労苦、貧しい子持ちの婦人の疲弊せる様、吏祿三百石の身は 私自愧、盡日不能忘)

7 題海図屏風

8 羸駿 (名馬も主を失い、みる目をもため人間の為に餓え衰え、芻粟を徴る吏のために羸駿肉とされてしまふ……賢者逸材を認めえぬ為政者への諷諭)

9 廢琴 10 李都尉古劍

11 雲眉寺孤桐 (立身者孤直当如此)

12 京兆府新栽蓮 (「託根非其所不如遭棄捐」人事も蓮と同じ)

13 月夜登閣避暑 (暑熱にさいし「將何救旱苗」となげく)

⑭ 初授拾遺 (天子を諫める官についた責任の自覚。杜甫・陳子昂才名括天地當時非不遇、尚無過斯位、況予蹇薄者寵至不自意驚近白日光、慙非青雲器……)

非常な感激と自覚を詠み出している。

15 贈元禎 16 哭劉敦質 17 答友問

18 雜興三首「楚王多内寵傾國選嬪妃又愛從禽樂……」

19 宿紫閣山北村 (「举杯未及飲暴卒來入門……十余人奪我席上酒擊我盤中殮主人退立斂手反如賓……」)

20 説漢書 (……每説元成紀憤憤令人悲 寄言為國者不得學天時、寄言為臣者可以鑒於斯)

源氏物語の白氏文集受容 | 諷諭詩の場合 |

21 贈樊著作 (陽城為諫議以正事其君其手如屈軼必指佞臣卒使仁者不得乘國鈞元禎為御史以直立其身其心如肺石動必達窮民東川八十家冤憤一言伸……)

⑳ 蜀路石婦 (道傍一石婦無記亦無銘……為婦孝且貞十五嫁邑人十六夫征行夫行二十載婦獨守孤爨其夫有父母老病不安寧其婦執婦道一如礼經……夫行竟不歸婦德轉光明……)

23 折劍頭 24 登樂遊園望

25 酬元九對新栽竹有憐見寄

26 感鶴 27 春雪

28 高僕射 (富貴人所愛……七十懸車蓋我年雖未老歲月亦云邁預恐薨及時貪榮不能退)

29 白牡丹

30 贈内……我亦貞苦士與君新結婚庶保貧與素僧老同欣欣

31 寄唐生 賈誼哭時事阮籍哭路岐唐生今亦哭異代同其悲唐生者何人五十寒且餓 不悲口無食 不悲身無衣 所悲忠與義 悲甚則哭之 大尉擊盜賊日 尚書叱盜時 大夫死兇寇……每見如此事聲發涕輒隨……我亦君之徒鬱鬱何所為不能發聲哭轉作樂府詩 篇篇無空文 句句必盡規功高虞人箴痛甚騷人辭非求宮律高不務文字奇惟歌生民 病願得天子知未得天子知甘受時人唾藥良氣味苦琴淡音聲稀不懼權 豪怒亦任親朋餓竟無奈何呼作狂男兒……)

32 傷唐衢二首 33 問友

⑳ 悲哉行 悲哉為儒者力學不知疲……成名常苦遲……沈沈朱門宅中有乳臭兒狀貌如婦人光明膏梁肌 手不把書卷身不擲戎衣二十襲封爵……朝從博徒飲暮有娼樓期……声色狗馬外一無知山苗與澗松地勢隨高卑古來無奈何……非君傷悲

古来いかなともすることなし、君のみ独り傷み悲しむことではない

のだ、と絶望の呻きをなげつける。父為時の苦渋の懐がそのまゝ、そこに形成されていたのである。

35 紫藤 詠俵の輩と妖婦

36 放鷹

37 慈烏夜啼 母を喪つてなく慈烏の哀切な啼声……慈烏鳥中之曾參

38 鸞詩示劉虔

39 采地黄者 麦死春不雨、禾捐秋早霜、歲晏無口食田中采地黄……

願易三馬 殘粟二救三 此苦 饑 腸……

民の飢寒のさまを詠出して生々しい。

40 初入太行路

41 鄧魴張徹落第 42 送王處士

43 村居苦寒

八年十二月五日雪紛紛 竹柏皆凍死、况彼無衣民廻  
獨村箇間、十室八九貧、北風利如劍、布絮不蔽身、  
唯燒蒿棘火、愁坐夜待晨……

44 納粟

「有吏夜扣門、高声催納粟、家人不待曉、場上張燈獨揚」  
簾淨如珠、一車三十斛、猶憂納不中、鞭責及僮僕……

45 薛中丞

(百人無一直……) 46 秋池二首

47 夏旱

早日與炎風枯樵我田畝……嗷嗷万族中、唯農最辛苦惘然望  
歲者出門何所覓、唯見棘與茨蘿生徧場圃……問天可能長不

雨

48 諭友

49 丘中有一士 二首

50 新製布裘

桂布白似雪 吳綿軟於雲 布重綿且厚 為裘有餘溫 朝擁坐至暮

夜覆眠達晨 誰知嚴冬月 支体暖知春

とよろこぶ。ところが、はっと自省する。

中夕忽有念 撫裘起逡巡 丈夫貴兼濟 豈獨善一身  
丈夫たるものは、一身の安楽のみに浸つてはならぬ。

安得万里裘 蓋裏周四垠 穩暖皆如我 天下無寒人

と願う。これは全く 杜甫の「茅屋為秋風所破歌」

八月秋高風怒号 卷我屋上三重茅……

安得広廈千万間 大庇天下寒士俱歡顏 風雨不動安如山 嗚呼何時

眼前突兀見此屋 吾廬獨破受凍死亦足

「上元二年の秋、暴雨風のため、浣花草堂の茅ぶきの屋根が吹き飛ばされた時の歌」156 P 『杜甫』目加田謙の系流を継ぐ詩魂である。ただ

し、杜甫の、自己は凍死を受くとも、というAに対し、白樂天の穩暖如我というA'の表現は、民衆をおもう切迫感、喚びおこす感動においていさゝか弱い。しかし式部にとっては初めて接する詩精神である。

51 杏園中棗樹

52 蝦蟇

一見美しくもなく無用視されるものをあげ、高貴、時をえたる人間  
のみの宇宙ではない事を、貧しくむさい大衆のいとなみのあること  
を、それが「どっこい、生きている」ことを知らしめようとする、  
その事実を感傷的にガア／＼、わめきたてるのではなく、人々の深層  
心理に深く、皮肉に植えつけようとする。式部の未だ目にしたこと

のない発想と表現である。

53 寄穩者 (由来君臣間、寵辱在朝暮、青青東郊草中有婦山路……)

54 放魚

55 文柏牀

56 溥陽三題 序(桂・修竹・白蓮)

57 大水 溥陽郊郭閑、大水歲一至、閭閻半漂蕩、城堞多傾墜、蒼茫

生海色、渺漫連空翠、風卷白波翻、日煎紅浪沸、工商徹屋去

牛馬登山避、況當率稅時、頗害農桑事、独有傭舟子、鼓枻

生意氣、不知万人災、自寬雖刀利、我無奈何、爾非久得志

九月霜降後 水涸為平地

洪水・早魃・苛役に責まれる庶民の苦しみと、登用されず野に埋もれる人材達の歎きを繰り返えし詠出し、これに対し権門子弟の豪奢な遊蕩の詩をさしはさむ。読む者の心にじんとうびく政治批判の声である。式部がなじんだ和歌では、このように生々しく厳しく庶民の生活は詠出されない。唯、花鳥風月のあはれ、をかし、又、己が身一人の保身、思うにまかせぬ立身出世、空しく老いる述懐、ままならぬ恋の悩みにとどまるのである。式部は、卷一諷諭で、頭にガンと一撃をうけたようなショックと、詩とは何か、人間にとつて文芸とは何か——歌や物語、それは人にとつては何なのであろうか——と考へこんだのではあるまいか。即ち、作家紫式部の開眼は、白氏文集、史記によつてなされた、と筆者は申すのである。

卷二 諷諭二

—続古詩十首

○戚戚復戚戚 送君遠行役 行役非中原 海外黃沙磧 伶俜独居妾

迢遞長征客 君望功名婦 妾憂生死隔 誰家無夫婦 何人不離拆

所恨薄命身 (a) 嫁違別日迫 妾身有存没 妾心無改易 生為閨中婦

死作山頭石

○掩淚別鄉里 飄飄將遠行……啼鳥時一声 古墓何代人 不知姓與

源氏物語の白氏文集受容 —諷諭詩の場合—

名 化作路傍土 年年春草生 感彼忽自悟 今我何當管

○ 栖栖遠方士 讀書三十年 業成無知己 徒步來入關 長安多王侯

英俊競攀援 幸隨衆寶末 得廁門館閑……主人終日歡 貧賤多悔

尤 客子終夜歎 婦去復婦去 故鄉貧亦安

2 秦中吟十首 序 其の序にいう。

貞元元和之際 予在長安 聞見之間 有足悲者 因直歌其事 命為

秦中吟 と。

貞元元和年間に長安に居住した作家が、巷間に聞見した「悲しむに足るもの」を「直ちにその事を歌つた」ものであった。それで秦中吟と命名したというのである。民の悲しみをリアルに歌いあげることに詩魂を傾けたのである。それは、議婚——貧しい娘にとつて、いかに結婚がむづかしいか。それに比べ富家の女は容易に嫁することが出来、嫁すること早うして夫を軽んず、と切々と訴える。この「議婚」受容については後述する。

○重賦

厚地植桑麻、所要濟生民、生民理布帛、所求活一身、身外充征賦、上以奉君親、國家定兩稅、本意在愛人、厥初防其淫、明勅内外臣、稅外加一物、皆以枉法論、奈何歲月久、貪吏得因循、浚我以求寵、斂索無冬春、織絹未成疋、繅絲未盈斤、里胥迫我納、不許覈逋巡、歲暮天地閉、陰風生破村、夜深煙火盡、霰雪白紛紛、幼者形不蔽、老者体無溫、悲喘與寒氣、併入鼻中辛、昨日輸殘稅、因窺官庫門、繒帛如山積、絲絮似雲屯、号為羨餘物、隨月獻至尊、奪我身上暖

買爾眼前恩、進入瓊林庫、歲久化為塵 (b)

詩歌にしてこれ程、痛烈な難詰があらうか。我が身上の暖を奪って

……とは、まさにそのものずばりの表現である。新製布裘であのように、これからは朝に夜に身をあたためることが出来るとよろこび、はつたと、より貪しい庶民の上をおもいやった彼であった。それが、何たることか、(b)のようになていたらしくである、と悲憤するのである。式部は、この詩にもいたく感動したもののようである。末摘花の巻において、光君に「幼者は形かくれず」と打誦させる。この扱ひ方も後述にゆずる。ただし見おとしてならないのは、式部が巻二諷諭秦中吟において、最初の讒婚からと、それにづく重賦から引用したことである。式部をして秦中吟十首から二首もとらしめた迫力が秦中吟にあつたとみなければならぬ。

○傷宅○傷友○不致仕○立碑○輕肥○五絃

○歌舞

秦中歲云暮 大雪滿皇州 雪中退朝者 朱紫盡王侯 貴有風雲興  
富無饑寒憂 所官唯第宅 所務在追遊 朱門車馬客 紅燭歌舞樓  
歡酣促密坐 醉暖脫重裘……日中為一樂 夜半不能休 豈知闕鄉  
獄中有凍死囚

貧富の甚しいへだたり、庶民と貴頭、の同じ人間とも思えぬ生きざまを如実に提示する。

○買花

3 贈友五首

吾友有王佐之才者 以致君濟人為己任 識者深許之 因贈是詩  
以広其志云

この序に明らかなように、人材が登用され、民衆の生活が安定する行政を切望するものである。

4 寓意詩 五首 ○5 說史 五首 ○6 和答詩 十首 ○7 有木詩 八首 ○8 歡魯 二首  
○9 反鮑遠白頭吟 ○10 青塚 ○11 雜感

卷二 諷諭

- ①七德舞 ②法曲歌 ③二王後
- ④海漫漫……源氏物語胡蝶卷引用
- ⑤立部伎 6 華原磬
- ⑦上陽白髮人……源氏物語幻卷引用
- ⑧胡施女 ⑨新豐折臂翁 ⑩太行路 ⑪司天台 ⑫捕蝗 ⑬昆明春水滴 ⑭城塩州 ⑮道州民 ⑯馴犀 ⑰五絃彈 ⑱蛮子朝 ⑲驟國樂
- 20 縛戎人 (達窮民之情也)……源氏玉鬘卷引用

卷四 諷諭 新樂府

- ①驪宮高 ②百練鏡 ③青石 ④兩朱閣 ⑤西涼伎 ⑥八駿圖 ⑦湖底松 ⑧牡丹
- 芳 ⑨紅線毯 ⑩杜陵叟 ⑪繚陵 ⑫賣炭翁 ⑬母別子 ⑭陰山道 ⑮時世粧
- ⑯李夫人……源氏 蜻蛉卷引用
- ⑰陵園妾……源氏 手習卷引用
- ⑱塩商婦 ⑲杏為梁 ⑳井底引銀瓶 ㉑宮牛 ㉒紫毫筆 ㉓隋堤柳 ㉔草茫茫 ㉕古塚狐 ㉖黑潭龍 ㉗天可度 ㉘秦吉了 ㉙鷓九劍 ㉚采詩官。

諷諭四卷の末に 采詩官 (監前王乱亡之由也)

采詩官采詩聽謠導人言言者無罪聞者誠下流上通……百辟入門皆自媚  
夕郎所賀皆德音春官每奏唯祥瑞 君之堂兮千里遠 君門兮九重闕  
君耳唯聞堂上言 君眼不見門前事 貪吏害民無所忌 奸臣蔽君無所  
畏君不見厲王胡亥之末年 群臣有利 君無利 君兮 君兮 願聽此  
欲下開二塗蔽二達人情一先向二歌詩一求二諷刺一  
を据える。君たる者が民庶の声を詩を介してきゝとるべきであり、

諷諭詩は國の政治の本を正すものであり、民の生命を護るものであるというのである。さて、この諷諭詩を、紫式部はどのように源氏物語の上に生かしているであろうか。

凶宅夕願夕願議婚未重賦未重賦未重賦海漫漫海漫漫上陽白髮人上陽白髮人縛戒人縛戒人玉鬘李夫人玉鬘李夫人  
陸奥國妾二首 八首九回

紫式部は、帚木く手習に及んで引用する。即ち、源氏全巻かきあげた諷諭の詩を離れなかつたのである。

結論をいえば、単に詩句の引用によつて情景を盛りあげる、或は作中人物に誦詠させる——その人物の心境表白、又その教養を表現する為にと——といった初步的かつ單純な受容のしかたのみに終らない。白詩諷諭の精神が深く紫式部の心底に溶けこんでいる。諷諭詩を消化しつくし、自己の營養としおえた、即ち、これによつて紫式部の社会に対する、人間に対する目は深まり、作家式部の見識となつた上で、自由自在に引用する段階に達していると申すべきであらう。

### 凶宅

長安多大宅、列在街西東、往往朱門内、房廊相對空、巢鴨松桂枝、狐藏蘭菊叢、蒼苔黃葉地、日暮多施風、前主為將相、(a)得罪竄巴庸、後主為公卿、(b)癡疾歿其中、(c)連延四五主、殃禍繼相鐘、自從十年來、不利主人翁、風雨壞簷隙、蛇鼠穿牆墻、人疑不敢買、日毀土木功、嗟嗟俗人心、甚矣其愚蒙、但恐災將至、不思禍所從、我今題此詩、欲悟迷者曾、凡為大官人、年祿多高崇、權重持難久、位高勢易窮、驕者物之盈、老者數之終、四者如寇盜、日夜來相攻、假使居吉上、孰能保其躬、因小以明大、借家可諭邦、周秦宅嵒函、其它非不同、

源氏物語の白氏文集受容 — 諷諭詩の場合 —

一興八百年、一死望夷宮、寄語家與國、人凶非宅凶

この一句を夕顔の巻に用いる。某の院の荒寥たる様を描写して

夜中も過ぎにけむかし 風のや、荒々しう吹きたるはまして松の響も深く聞えて気色ある鳥のから声に鳴きたるも巢はこれにやと覚ゆ……此方彼方氣遠く疎ましきに人声せず……火は仄かにまたよきて母屋のきはにたてたる屏風の上、ここかしこの隈々に見ゆるに物の足音ひししと踏み鳴らしつゝ後より来る心地す……

夕顔の失神、死へともりあげてゆくのであるが、某院と銘うただけあつて、昔はさる権門の宏壯閑雅な邸第であつたと想われるが、氣易く光君アバンチュールの宿となる程、当今は使用されることなく荒れ果てた邸宅、巢・狐も棲息するかと疑われる。その背景に凶宅の詩の連想は、まさに不可欠である。「凶宅」の主は、次々に(a)(b)(c)と死亡、罪等の殃禍にあつたのであつた。不吉な予感——女君の死・光君の将来流論の運命——をここで与えるには、恰好の連想。

文集に習熟している筈の光君の想念の中に、作者地の文の中に、当然將來されるべき引用詩句である。不気味さ形成上、果せるかな、その効果は拔群である。情景を生き々と写し出す効果に白詩を引用する場合を又、「海漫漫」にみる事が出来る。

### ○海漫漫

海漫漫、直下無底傍無邊、雲濤煙浪最深處、人傳中有三神山、山上多生不死藥、服之羽化為天仙、秦皇漢武信此語、方士年年采藥去、蓬萊今古但聞名、煙水茫茫無覓處、海漫漫風浩浩、眼穿不見蓬萊島、不見蓬萊不敢歸、童男叩童男叩女舟中老、徐福文成多誕誕、上元太一虛祈禱、君看驪山頂上茂陵頭、畢竟悲風吹蔓草、何況玄元聖祖五千

言、不言葉不言仙不言白日昇青天

六條院春の御方案の上の榮華を形成する巻は、秋好中宮の挑戦に報いようと構える春爛漫の胡蝶の巻である。三月二十余日の頃ほひ、春の御殿の遊宴の様は如何に。秋好中宮退出を好機に六條院は、秋の御殿より春の御殿へと通ずる広い池に龍頭鶴首の舟を浮べさせ、童男卯女になぞらへて美しい若女房をのせて春の殿へと漕ぎ廻らせる。

南の池は此方にとほしかよはしなさせ給へるを小さき山をへだての関に見せたれどその山の先より漕ぎ廻ひて東の釣殿に此方の若き人々集めさせ給ふさる大きな池の中に輝きし出でたればまことの知らぬ國に來たらむ心地してあはれに面白く見慣はぬ女房などは思ふ中島の入江の岩陰に……

○風吹けば浪の花さへ色みえて…… ○龜の上の山も……

○春の池や井手の川瀬に…… ○春の日の……

などやうのはかなき事どもを我が心々に言ひ交はしつゝ行く方も帰らむ里も忘れぬべう若き人々の心を移すにことわりなる水の面になむ……

目を凝らしてみても龜の上の山、蓬萊山は見えぬ、蓬萊山を尋ねあてなくては空しく帰るわけにはゆかぬ、蓬萊山に生うという不死薬を飲めば、不老不死の身を保てようけれど、それは徐福や文成の詭誕の言であつて、蓬萊山をさがしあてる前に、舟中に、童男卯女は老いてしまった……秦の始皇帝・漢の武帝が、その権勢富貴を恃んで不老不死の薬を求めしめた愚行を美しい夢幻の世界を描いて否定する、「海漫々」をもつてきて、これを「舟中老」ではなく、又、「不見蓬萊不敢帰」でもなく、さながら蓬萊をおもわせる築山、こ

の大池に泛ふ龍頭鶴首の舟にゆれ管絃のひびきに心奪われ「帰らむ里も忘れ」「老いせぬ名を船中にのこさむ」と、陶然となつて若い女房達を描いて、六条院の豪華絢爛たる春の殿の幻想美を現出させる。じつに巧妙な引用による造形である。

李夫人、凌園妾、上陽白髮人

「李夫人」は蜻蛉巻に、浮舟入水とおもいこんで歎く薫が「李夫人」の詩句を口ずさむ、

……さまんゝに思ひ乱れて人木石にあらざれば皆情ありと打誦じて臥し給へり……

桐壺巻において「あけくれ御覽ずる長恨歌の御絵亭子の院のかかせ給ひて伊勢貫之に詠ませたまへる大和言葉をも唐土の詩をも唯その筋をぞ枕言にせさせ給ふ」と長恨歌に共鳴した桐壺帝と同じ造形である。心情形成に効果を狙つた場合である。

「凌園妾」は手習の巻に引く。浮舟のかたい決意もだがたく剃髪させた僧都が、若く美しい浮舟のいたいたしい尼髮姿を前にさとし、

何かおぼし煩ふべき常なき世に生ひ出でて世間の榮華に願ひまつはるゝ限りなむ所狭くすてがたく我も人も思すべかんめる、かかる林の中に行ひ勤め給はむ身は何か怨めしくも恥しくも思すべき、このあらむ命は葉の薄きが如しと言ひしらせて「松門に曉いたりて月徘徊す」と法師なれどもいと由々しう恥かしげなる様にて宜ふ事どもを、思ふ様にも言ひ聞かせ給ふかなと聞きぬたり

松柏の枝に風がわたり、曉まで月が徘徊する寂寞、御陵を守るは、花のかんはせをもつ宮女、妬猜にあつて罪をえ、幽閉の身の佻しい

日々を詠じた陵園妾の詩句を、僧都は吟誦する。浮舟をいとおしむ  
励ます僧都の人柄がにじみ出る。

「上陽白髮人」は幻の巻に引く。紫上を失って悲歎にくれる源氏  
が、その詩句を口ずさむ。

五月雨はいとどながめ暮し給ふより外の事なくさうどしきに十  
余日の月花やかにさし出でたる雲間の珍しきに……俄に立ちいづる  
村雲のけしきいとあやにくにて、おどろしう降りくる雨にそひ  
てさと吹く風に燈籠も吹き惑はして空闊き心地するに「窓をうつ声」  
など珍らしからぬ古言を打誦じ給へるも折からにや……

これはその後、「夕殿螢飛んで」と例の古言もかかる筋にのみ口  
なれ給へり」と同じく、源氏の甘美な悲愁が、上陽白髮人、長恨歌  
のそれに通じるものであり、この引用こそが、源氏的心情形成に必  
須不可欠であると式部は思ったのである。

「縛戎人」は玉鬘の巻に、悲痛な豊後介の心情造形に援引する。  
父の遺言故に、筑紫に妻子をのこし、玉鬘を守って上洛の船中、前  
途の不安、遺棄してきた妻子の生活はいかにと涙する。それはまさ  
に胡地に妻子を残して身一つで漢土にもどりながら漢土で胡虜とし  
て酷使され呻吟する縛戎人の心境に外ならない、

○縛戎人 達窮民之情也

縛戎人縛戎人、耳穿面破駭入秦、天子矜憐不忍殺、詔徙東南吳興  
越、黄衣小使録姓名、領出長安乘通行、身被金瘡面多瘡、扶病徒行  
日一驛、朝飡飢渴費杯盤、夜臥腥臊汚牀席、忽逢江水、憶交河、垂  
手齊声、嗚咽歌、其中一虜語諸虜、爾苦非多、我苦多、同伴行人因  
借問、欲説喉中氣憤憤、自云、郷宮本涼原、太曆年中没落蕃、一

源氏物語の白氏文集受容 — 諷諭詩の場合 —

落蕃中四十載、身着皮裘繫毛帶、唯許正朝漢儀、斂衣整巾、潛淚  
垂、誓心定歸郷計、不使蕃中妻子知、暗思幸有殘筋骨、更恐年衰婦不  
得、蕃候敵兵、鳥不飛、脱身冒死奔逃歸、晝伏宵行經大漠、雲陰月  
黑風沙惡、驚藏青塚、寒草疎、偷度黄河夜水薄、忽聞漢軍鼙鼓声、  
路傍走出再拜迎、游騎不聽能漢語、將軍遂縛作蕃生、配向江南卑濕  
地、定無存卹、空防備、念此吾身仰訴天、若為辛苦度殘年、涼原郷  
井不得見、胡地妻兒虛棄、捐沒蕃被囚、思漢土、歸漢被劫、為蕃虜、  
早知如此、悔婦來、兩地寧如一處苦、縛戎人、戎人之中我苦辛、自  
古此冤、応未有、漢心漢語吐蕃身

川尻といふ所近づきぬといふにぞ少しきいづる心地する例の舟  
子ども唐泊より川尻押す程はと謡ふ声の情なきも哀れに聞ゆ豊後  
介哀れに懐かしく謡ひすさびて「いと愛しき妻子も忘れぬ」とて  
思へばげにぞ皆打捨ててける如何なりぬらむはかしく身の助  
と思ふ郎等どもは皆みてきたり我をあしと思ひておひまどはし  
て如何しなすらむと思ふに心弱く打泣かれぬ「胡の地の妻子を空  
しく捨てて」と謡するを兵部の君ききて……帰る方とてもそ  
の所といきつくべき故郷もなし知れる人といひよるべき頼しきに  
も覚えず唯一所の御為によりこゝらの年月住みなれる世界をは  
なれて浮べる波風に漂ひて思ひ廻らす方なしこの人をもいかにし  
なし奉らむとするぞとあきれて覚ゆれど……

「縛戎人」の一句「胡地の妻子を云々」を誦する豊後介、それを聞  
いて同じ境遇の兵部の君ものこしてきた夫の上におもいをやる、ま  
ことに「たけ高く」悲しい別れの情感形成に、これ亦、なくてはな  
らぬ、美しいが重く苦しい白詩諷諭の世界である。

さて、「重賦」の詩句をうらぶれた旧邸に棲む末摘花を訪れた貴

公子、今をさかりとときめく当帝第二子の光君が口ずさむ。教養として学んだ白詩の詩句が、雪の門をあげようと寒さにこごえる翁とその女、孫を見やうとぬく／＼絹につつまれた光君は彼等のこごえる寒さを考えようとせず、鼻の先を赤らめて寒がついていた末摘花をおもい出して微笑しながらである。「悲哉行」において権門の年少子弟のさまが詠出されていた。「貧吏」ではないが、為政者、税を懐中する者、富める者一門と、納税者、統治される民、貧しき者との対比がここにもある。地の文、語りの立場は光君の側からなされる。しかし、読者、受容者は光君の側からのみ受容はしない。それを計算に入れての上である。けだし複雑な深みが出ているのである。

#### ○議婚

天下無正声、悅耳即為娛、人間無正色、悅目即為姝、顔色非相遠、貧富則有殊、貧為時所棄、富為時所趨、紅樓富家女、金縷繡羅襦、見人不斂手、嬌癡二八初、母兄未開口、已嫁不須臾、綠窓貧家女、寂寞二十餘、荊釵不直錢、衣上無真珠、幾迴人欲聘、臨日又踟躕、主人曾良媿、置酒滿玉壺、四座且勿飲、聽我歌兩途、富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、嫁晚孝於姑、聞君欲娶婦、娶婦意何如

また文章の生に侍りし時 賢き女の例をなむ見給へし……

それはある博士のもとに学問などし侍るとまかり通ひし程に主人の女ども多かりと聞き給へてはかなき序に言ひより侍りしを親聞きつけて杯もいでて「我が兩の途歌ふをきけ」となむ聞えごち侍りしかどをさ／＼打解けてもまからずかの親の心を憚りて流石にか／＼づらひ侍りし程にいと哀れに思ひ後見、寢覺の語らひにも身の才

つき朝廷に仕うまつるべき道々しき事を教へていと清げに消息文にも假字といふものを書き交せずうべ／＼しく言ひまはしはべるにおのづからえまかりたえで、その者を師としてなむ確なる腰折文作事など習ひ侍りしかば今にその恩は忘れ侍らねど懐かしき妻子と打頼まむに無才の人生悪ならむ振舞を見えむに恥しくなむ見え侍りし……「月頃風病重きにたへかねて極熱の草葉を服していと臭きによりなむえ対面賜はらぬ目あたりならずともさるべからむ雜事らは承らむ」といと哀れにうべ／＼しくいひ侍り……げにその臭ひさへ花やかに立ちそへるもすべなくて……これより珍しき事は侍ひなむやとて下りぬ

雨夜の品定めに、文章生出身の藤式部丞を登場させ、博士の家庭を造形する。生真面目一徹の賢女。門弟の文学生が娘に通うと知って飛びつく思いで議婚を口ずさみ杯をすゝめる博士。それを極めてクールにみて「我が道をゆく」式部丞。すでにこの談話をする時点において、(4)によれば彼女は過去の忘れられた女性となっている。「北方」などにしてはいる気配はない。諷諭詩議婚にこめられた白楽天の訴えをよそに、これをよんで胸に少しはこたえた筈の中国の讀書子も日本の青年も、いさ／＼かも影響されることなく、貧寒な学者の娘は、その野暮な純情は、貴公子達の雨夜の一笑話となるにすぎない、という、実に鮮やかな議婚受容の手法である。更に式部は、議婚の世界を如実に表現してみせる。東屋巻において、浮舟が、常陸守の妻子ではなく、富裕な国守の後援がのぞめぬ故親王女と知って少将は態度一変。

少将の君に参でて「しか／＼なむ」と申しけるに気色あしうなりぬ「初めより更に守の御女にあらずといふ事をなむきかざりつる同じ

申すべきであらう。

ごとなれど人間も氣劣りたる心地して交せむにもよからずなむあるべき……さやうの辺にいき通はむ人のをさく許さぬ事なれど今様の事にては咎あるまじう、もてあがめて後見だつに罪隠してなむあるを……」「まことに守の女と思さばまだ若うなどおはすともしか伝へ侍らむかし中に当るをなむ姫君とて守はいとかなしうし給ふなる」と聞ゆ「いさや初めよりしかいひよれる事をおきて又言はむこそうたてあれ、されど我が本意はかの守の主の人柄も物々しく大人しき人なれば後見にせまほしう、見る所ありて思ひ始めし事なり。専ら顔容貌の勝れたらむ女の願ひもなし。品あてに艶ならむ女を願はば易く得つべし。されど寂しう事打合はぬみやび好める人の果々は物清くもなし、人にも人とも覚えたらぬを見れば、少し人にそしらるともなだらかにて世の中をすごさむ事を願ふなり。守にかくと語らひてさもと許す氣色あらば何かはさも」と宣ふ

あれ程懇望し、「契りし程を待ちつけで『同じくは疾く』と媒に催促していた左近少将は、「猶一わたりは辛しと思はれ人には少し譏らるともながらへて頼もしき事をこそいとまたく賢き君にて思ひとりてければ日をだに取替へて契りし暮にぞおはし始めける」という為体である。この少将「またく賢き君にて」と地の文で皮肉くる。いつの世にもざらにある計算高いインテリ青年を、まこと生々しく造形しあげるにいたった。議婚受容も行きつくところまで行きついたらと評すべきである。

背景・舞台造形に、登場人物の心情形成に、引用される段階は、まだ容易である。「議婚」引用の美事さは、源氏物語世界全体に漲る人間観、「哀れ」の造形に必須不可欠の要因となつてしまった。諷諭詩は、式部の血肉と申すか、思想と、すでになつてしまったと